
未来の伝説

skylark

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の伝説

【Nコード】

N0223W

【作者名】

skylark

【あらすじ】

世界を守るために立ち上がった勇者と、勇者を倒し真の支配者になることを信条とする魔王。さらに目的の不明な魔法使いや第3勢力が現れ、世界の覇権を巡る戦いが始まろうとしていた。しかし、たび重なる世界の危機を前に頼みの勇者は記憶を失っていた。

これは記憶喪失の勇者と我が道を行く魔王の物語。

プロローグ

魔王が世界に対して宣戦^{せんせんぷこく}布告した。その噂^{うわさ}は大陸の端^{はし}にあるのかな片田舎^{かたいなか}にさえ届いた。その片田舎に住む農家の三男^{さんなん}に生まれた俺が・・・まさか噂の魔王と戦う運命^{せめ}を背負^{ふしき}ってるなんて。世の中わからないものである。でも、不思議^{ふしぎ}と戸惑^{とまど}いは少ない。

俺を勇者と認めた聖剣『シュトラウス』を目の前に掲^{かが}げてみた。手に入れてからまだ三日と経^たっていないのに俺の手によく馴染^{なじ}んでいる柄^{つか}。刀身が青白く光っているこの聖剣を見ているとやる気がみなぎってくる気がする。

「・・・よし・・・!」

ゆっくりと腰の鞘^{さや}にしまってから顔を上げる。

そして俺は、この世界を守るための一步を踏み出した。

その1

ここはどこだ。

湿^{しめ}った石の上から頭上へと視線を移動させる。

木々の隙間^{すきま}から、青い青い、今まで見たこともないくらい青い空が見える。

「・・・・今まで・・・・？」

おかしい。『今まで』って、今から前って・・・どんなだったっけ？

「思い、出せない・・・？」

今はわかる。

俺はどっかの川^{かわ}辺^へにいる。・・・どの川^{かわ}辺^へかはわからないが。そして多分周りは森だ。木しか見えないからまず間違いないだろう。

「・・・・・・」

で、それ以外は？

「・・・・・・」

困った。どうしよう。俺っていったい誰で何してたんだ？

いまいち働かない頭を振ってとりあえず川の水に浸かっていた下半身を陸に引き上げる。

ふむ、大地が体にしつくりくるな。どうやら俺は陸上の生物らしい。……なんで陸上の生物が水に浸^ひかってたのかよくわからないが。

半身浴^{はんしんよく}してたとか。服着^はたまま。

「あり得ない」

呟^{ささや}いて立ち上がる。少しふらふらするが問題なさそうだ。でもちよつと頭がずきずきする。ふと『記憶喪失^{きおくそうしつ}』という単語が頭に浮^うかびあがってきた。

記憶喪失。きつとそれが今の俺の状態だ。

それじゃあ考えたって俺が何者でなんでこんなとこにいるのかわかるわけないな。うん、俺は悪^{わる}くなかった。それがわかればまだ良いだろう。・何が良いのかと問^とわれたら答^{こた}えられないが。

「さて、これからどうしよう」

気分転換^{きふてんげん}に声を出^だしてみる。誰も返事^{へんじ}をしてくれないのが無^む性に寂^{さび}しかった。しかしそれも仕方がない。周りには誰もいないのだから。

「……とりあえず服を乾^{かわ}かさないとな」

独^{ひとり}り言^ごを言^いいつつ腰^{こし}に手^てを当^あてる。

「ん？」

硬^{かた}いものが腰^{こし}にぶら下^さがっている。腰^{こし}から外^{そと}して顔^{かお}の前に持^もち上^あげ

げてみた。

剣だ。鞘さやごと外したからどんな刀身なのかわからないがどうやら細身の両刃剣らしい。柄つかを握ってみると、手にしっくりとよく馴染なじむ感触がする。

ひょっとして俺は剣で身を立てるため必死で修業したとか、騎士になりたくて家を飛び出してきたとか、そういう経歴の持ち主ではないだろうか。よくよく手のひらを見てみるとマメがつぶれて固くなっているし、どうやら熱心に剣の稽古けいこに励はげんでいたようだ。我がことながら一生懸命な人間には好感が持てる。俺は頑張り屋な剣士志望（仮）だということにしておこう。

さて、ではそんな俺がこんなところに居るのはなんでだ？

・・・考えてもわからないことは考えないに限る。どうしたつてどうしようもないんだから。

足元はまだ多少覚束たしやうおぼつかないが、ここでこうしていても埒らちが明かない。とにかく一歩でもいいから歩きだすことが大切だ。そう考えて森の中に踏み込んでいく。

前後左右見渡しても木しか見えない。これは本格的に危ない気がする。やや遅い危機感ききかんを抱いた俺は少し焦りあせだした。焦りすぎて、足元を見ないで進んで木の根に引っかけたり、低い枝に頭をぶつかけたり、とにかく散々（さんざん）な目に合った。

そのせいか、彼が声をかけてくるまで俺はその存在に全く気が付いていなかった。

「君、そっちに行くと森の奥に入ってしまうよ。人里に出たいなら逆方向だ」

穏やかな^{こわな}声音でそう言ったのは、
優しい^{ほほえ}な微笑みを浮かべた青年
だった。

その2

濃紺のうこんの髪。

蒼い瞳あお。

全身を隠す黒いローブ。

表情を見る限り悪い人ではなさそうだけど、何故だろう。あまり関わり合いになりたくない雰囲気かきを醸かもし出している気がする。

俺とは知り合いではないようだし、善意ぜんいで声を掛けてくれたんだろうけど、正直声をかけないでよかった。なんだかそう思わせる人だった。

・・・俺にんげんふしんって実は人間不信だったのか？記憶をなくす前の自分がわからない。それって結構不安なことだったんだな。初めて知ったよ。

いや、初めてではないかもしれない。ひょっとして記憶を失うのは日常茶飯事にちじょうさはんじとか。そんな日常は嫌だがそうだったら面白いだろうな・・・。「毎日が新鮮！」みたいな。

「て、そんなわけないし・・・」

現げんに今記憶喪失になっていて楽しいことは一つもない。

「どうかしたのかい？」

青年が覗き込んできた。心の内まで見通されそうでつい顔を逸そらしてしまった。失礼かな、とは思ったがとっさの行動は制御不能せいぎふのうだ。

「いや、何でもない・・・です」

「ふうん・・・。そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。勇者を襲う

なんてリスクの高いことはしないから」
「・・・・・・？」

彼の言葉が引かかった。今、変な単語を聞いたような・・・？
何か、聞き逃してはいけないことを言ったような気がするが・・・。
しかし綺麗な顔で笑う人だな。思わず見惚れてしまつて何かおかしいのかわからなくなつてしまつたぞ。

「何か気になることでも？」
「えっと・・・」

何が気になつたんだ？ちよつと前の彼のセリフを思い出す。

『ふうん・・・・。そんなに警戒しなくても大丈夫だよ』

これじゃない。もつと後だ。

『何か気になることでも？』

そつ、気になることはあるんだ。これより前。

『勇者を襲うなんてリスクの高いことはしないから』

・・・・・・。

『勇者を襲うなんてリスクの高いことはしないから』

・・・・・・。えっと・・・・？

『勇者を襲うなんてリスクの高いことはしないから』

・・・これだ！

勇者？俺が？そんなバカな・・・何かの間違いだ！

混乱が頭を支配する。ええいつ、考えてもわからないなら訊いてやれ！

「あの、つかぬことをお訊きたいのですが」

「うん？何ですか、勇者様」

面白がっている口調が不愉快だ。でも、今はもつと大事なことを確認するべきだ！・・・というか今また勇者って言わなかったか？

「それ、何？『勇者』ってどういうこと？！」

「どういうこととは？君は勇者だ。その腰の聖剣『シュトラウス』が何よりの証拠。それ以外に、何の説明が要るのかな？」

さっきとは打って変わって真剣な表情を見せる。その視線が差す腰の剣を見やる。高そうだとは思ったが、まさか聖剣とは・・・。
いや、これが聖剣とは限らないんじゃないか？聖剣に似せて作った贋作である可能性もある。聖剣なんて皆真似したがるだろうし、
騎士志願者（仮）の俺が験げんを担いで聖剣モドキを手にしても不思議じゃない。ああ、きつとそうだ！

「隠したって無駄さ。その聖剣『シュトラウス』は刀身が淡く光っているはずだ。自分が勇者じゃない、なんてあくまでしらを切りた
いなら今ここでその剣を抜いて見せてよ」

光る剣？確かにそれは特別な感じがする。それに、おいそれと真似できない神聖さも漂うのだろう。ならば確かに抜けばわかるというものか。どの道、俺なんかが持っているような剣が聖剣だなんて

有り得ないだろう。

ベルトから剣を外す。右手で柄を握って、ひとつ大きく息を吸う。胸がドキドキする。

一瞬だけ息を止め、次に吐き出しながら一気に引き抜く。途端とたん緩い（ゆるい）光が目に入った。優しい光を纏まとった刀身に目を奪われる。

綺麗だ。素直にそう感じる剣だった。これが聖剣以外の何だっていうんだ。どこから見ても聖剣にしか見えない。

「ほら、それは聖剣だろう？ということとは、君は勇者であると主張しているようなものだ」

そんな青年の言葉が、時間をおいてゆっくりと浸透する。

……俺が勇者？本当に？もしそうなら、勇者を信じる人にとっても顔向けできない。世界を救う存在が記憶喪失なんて情けない。むしろ俺が助けて欲しいこの状況。

どうして俺が勇者なんだよ。おかしいだろ、いろいろと。……

しかし勇者は聖剣を持つ者の宿命。今からでも遅くない。勇者らしくするんだ……！

意気込み一つ、青年に視線を戻す。

「で？勇者が何故こんなところに居るんだい？」

「残念ながらその質問には答えられないんだよ」

なるべく勇者っぽく威厳いげんに満ちた口調で話してみた。青年が美しく笑った。でもどこか愉たのしんでいるような様子だった。何かおかしな所でもあっただろうか？いきなり口調を変えたのがダメだったのか？

「魔王を倒すのが目的の勇者様に「何故」、なんて訊くほうが間違

っていたね」

俺は動揺を露とも知らず彼は勝手に納得してしまった。まだ愉しそうに笑っているし、元々こういう人なのだろう。

「勇者様はお仲間を連れたりはしないのかな？」

「仲間？ いや、そういうわけじゃない、と思う」

「と思う？」

「あつ、いや、別に仲間を連れてもいいかなあっていう意味だ！」

危ない危ない。勇者っぽく言わなくては・・・。

「へえ、じゃあ今仲間はいないってこと？」

「えつと、今はいない・・・多分」

記憶がないからどうしても断言できないが。もしかしたら、今は別行動をしているだけで本当はいるのかも、と思うとやっぱり「多分」がついてしまう。これ以上突っ込まれるようだったらもう本当のことを言ってしまうおう。

「じゃあ僕が立候補して良いですか？」

「えっ?!」

予想外の言葉に驚いた。こんな得体の知れない勇者（勇者なんだから正体はわかっているのだが）に誰がついて来るって？

思わず目の前の美しい顔をまじまじと見つめてしまった。

「認めてもらえたら嬉しいな」

「・・・」

魔王に挑むのだ、仲間はあるに決まっている。だけどまだ勇者としての心構えもできていない、どころか、記憶すらない自分についてくることが果たして良いことなのか・・・。

俺は悩んだ末に結論を出した。

その3

ここはリーガルという街にある宿屋兼食堂だ。あの森から一番近かった街である。俺とシュナイゼル（森で出会った美青年のこと。名前を訊いたらそう答えた）は、食堂の隅で顔を突き合わせていた。

「ではまず、君の記憶を取り戻すことにしよう」

俺が記憶を失っていることを話した後のシュナイゼルの言葉だ。あっさり信じたし、仲間になることを翻したりしなかった。本当に変わっている。大丈夫なのか、と俺のほう心配になってしまう。

「さしあたって、一番に思い出してほしいのは、名前、かな。なんて呼んだらいいのかわからなくて困るからね」

いや最初がそこかよ！とツツコミかかって止めた。なんだか無駄な気がする。それに俺自身、自分の名前を早く思い出したいと思うから。

「でも思い出そうと思って、思い出せるわけじゃないし……。どうしたらいいのか、全然わからないんだけど」

思考が行き詰って、もはや勇者っぽく喋ることも止めてしまった。早く思い出して安心したい。それが俺の切実な願いだ。いや、それよりも先に風呂に入りたい。まだ泥だらけの汚らしい姿のままでし。

だがシュナイゼルは、そんな俺の願いなど知らない。よって適当な答えしか返ってこなかった。それは例えば、「頭を打ったら思い出すんじゃないかな？」とか「記憶を失った場所に行ってみるとか？」

などなど、である。

本気で言っているのだろうか？だとしたら彼は、記憶探しなど本当はどうでもいいと思っているに違いない。

「まあ、記憶を思い出すまでは「勇者様」って呼ぶよ」

にこにこ笑ってそんなことを言う。それはそれで恥ずかしい。間違っではないが真面目にそう呼ばれるには抵抗がある。

止めて欲しい。そう言おうと彼を見るも、とっても愉しそうな笑顔を浮かべているだけだ。なんとなく名前を思い出した後も彼は「勇者様」と呼び続けそうな気がしてきた。妄想ではない、恥ずかしい未来を回避^{かいひ}するため、頑張^{がんぱ}らなければならぬ。

そんな決意^{けい}を密^{ひそ}かに固めた俺の姿を見て、シュナイゼルは口を開いた。

「ま、とりあえず君はお風呂にでも入ってきたら？勇者様がそんな汚^{かっこう}い恰好^{かっこう}をしているのはどうかと思うよ」

「あ、ああ……。じゃあ今日はこれで解散しようか」

宿は同じだが取った部屋は別々。なんだか信用されていないような、逆に一応^{けいかいしん}の警戒心^{けいかいしん}はあってほっとしたような、微妙な気分になった。

翌朝。俺の名前がわかった。

その4

それは朝、着替えたときに気がついた。着替えた、と言っても寝るときに脱いでいたシャツとズボンを着るだけなのだが。記憶を失う前はわからないが、今の俺は剣以外の持ち物はない。

とにかく、シャツを着るとき何気なく見た襟えりの内側。そこに何か書いてあった。

「・・・ん？」

目を凝らして見てみるが、汚れと一体になっていて読めない。

「昨日洗ったんだけどなあ・・・」

それほどまでに汚かったのか、この服は。

数分、凝視ぎょうしして諦めた。しかし一体何が書いてあったのか。何故か異様いように気になる。

「そつだ！上着に書いてあるならズボンにも何か書いてあるかも・・・」

思い付きだが良い案がする。早速既に穿はいていたズボンを脱いで裏返す。どうでもいいが、パンツ一丁で色褪いろあせたズボンを必死で見る男なんて、この上なく怪しくないか？誰もいない室内でよかった。

場違いな考えを脇に置いて、ズボンを上から下まで見る。問題の文字、だと思われるそれはすぐに見つかった。ズボンの後ろ、尻部しりの上、つまり腰が当たる部分に書いてあったのだ。

「お、あつた。え〜と・・・ん〜、ア？・・・ア、・・・ア・・・
駄目だ、後はよくわからない」

どうやら3文字で、アから始まる言葉だということしかわからなかった。

上着とズボン。その2つをベッドに並べて、文字を見比べてみる。
一緒・・・のような気がする。少なくとも、どちらも3文字前後の
短い単語だ。

何だろうか。もしかしたら、俺の記憶を呼び覚ますものかもしれない。
ない。

俄然やる気が出てきて、自分の服の上に身を乗り出す。そこで部
屋の扉が音をたてた・・・ような気がした。いや、扉が勝手に鳴るわ
けないのだから誰かがノックした音だろう。あまりに小さい音だっ
たので勘違いかと思っただが、再び聞こえた。さらに、「勇者様？」
という声も。

シュナイゼルだ。慌ててドアノブを掴むが、そこで今の自分を思
い出す。パンツ一丁のままだった。さすがにこれで人前に入るわけ
にはいかない。3回目のノック。

「どうしたの、勇者様？まさか刺客に殺されたりするのかな」
「さらつと酷いことを言うな！・・・あー、今まだちょっと出られ
る格好じゃなくって・・・。すぐに行くから下で待っててくれないか
？」

まさか、パンツしか穿いていません、とは大声で言えない。どん
なことを忘れていても、羞恥心はちゃんと備わっているようで安心
した。そんなことを考えていると、扉の向こうで笑ったような音が
した。

「なんとなく声掛けただけだから、まだゆっくりしていいよ」

という声がして、足音が去っていく。音が聞こえなくなってから、手早く服を着る。

シュナイゼルはゆっくりしていて良いと言っていたが、待たせるのは悪い。謎の文字は気になるが、考えてもわからないなら、今は後回しだ。そう決めて、『シュトラウス』を手取る。一度刀身を確かめてから身に着けようとする。

「・・・あれ？これって」

不意に見た鞘に何か、引っかけ傷のようなものがあるのを見つけた。まるで意図して付けたみたいに綺麗な傷跡だ。きずあと指でなぞってみる。

「・・・なんか、文字、みたいだ・・・！もしかして『シュトラウス』にも何か書いてあるのか？」

もう一度なぞってみる。確かに、何か文字が書かれている。3文字の言葉だ。俺はそれを読んでみた。

「ふーん、で、何が書いてあったんだい？」

昨日と同じテーブルで食事を摂りつつ、先ほどわかったことを報告する。俺としては、かなり重大な発見をしたと思っているのに、シュナイゼルは興味がなさそうな態度だった。別にそれが不満というわけではないが、ちょっと悔しくて発見するまでを事細かに話し

てしまった。おかげで、どうでもいいことまで暴露ばくろしてしまった気もするが・・・まあいいだろう。

「とにかく！そこに彫られていたのは、人の名前だったんだ！それってひょっとしなくても、俺の名前ってことだと？！」

この重大さを共有したくて、つい大声を出してしまった。しかし、相変わらず彼は目の前の食事を、消化することを優先している。

「へえ」

返事も生返事だ。

「・・・ちゃんと聞いているのかよ？」

「聞いてますよ、勇者様。・・・でも、温かいものは温かい内に食べたいじゃないですか」

「それはそうだけど・・・で、書いてあった名前のことだが」「うんうん、ついに勇者様の名前がわかるんだね。皆お待ちかねだよ、きつと」

ようやくこちらを見て、にこりと笑った。でも、『皆』って誰のことだ？このテーブルには俺達しかいないが・・・。

「・・・まあ、いいか。そんなことより、俺の名前だ。」

「そう、『シュトラウス』には、『アルト』って書いてあったんだ！」

つまり、俺の名はアルトってことだ。そうやって自覚すると、なんだかしっくりくる。「これが俺の名前だ」って確信をもって言える。そのことが、どうしようもなく嬉しい。やっと俺の外観が見え

てきた気がする。

「ふんふん、アリト、ね。そういえばそんな名前だったっけ」
「・・・・・・は？」

今こいつ何て言った？

「・・・・どういうことだ？まさかお前、俺の名前を知ってて隠してたのか？」

「隠してはいないよ。噂で聞いたことあったかな、ってレベルだったんだ。といつてもうる覚えだったし、本当かどうかわからないから黙ってたけどね」

「だとしても、言ってくればよかったのに・・・・。何か思い出したかもしれないだろ？そうすれば、こんな、「何て書いてあるんだ、これは」なんて考えなくてもよかっただろうし・・・・」

ぶつぶつと文句を並べ立ててみるも、シュナイゼルはどこ吹く風でテーブルの上を片付けている。

「さ、そんなことより、もう出発しよう」

食器をテーブルの片隅にまとめて、席を立った。いつの間にかその手には荷物が握られている。

「出発って・・・・どこにだよ？てか、「そんなこと」とか一言で話で片付けるなよっ」

先ほどのこともあり、拗ねたような口振りになってしまった。しかしシュナイゼルは、そのすべてを無視して意味深な笑みを浮かべるだけだった。そして何も言わないまま、外へ向かう。俺を待つ

もりもないようで、振り向きもせずに歩いて行く。

仕方ない。いろいろ言いたいことはあるが、とりあえずついて行くことにする。

「で、どこに行くかぐらい教えてくれてもいいんじゃないか？」

追いついた先で訊く。シュナイゼルは隣を歩く俺を見て頷いた。

「そうだね。行き先ぐらい知りたいよね。・・・ところで勇者様？勇者様は魔王がどこにいるか知ってる？」

「は？魔王？・・・知ってるわけないだろ」

何て言っただって俺は記憶喪失中だからな。とか、胸を張れることじゃないけど。

「うん、もちろん今の勇者様も知らないだろうけど、多分、記憶を失う前の勇者様も知らなかったんじゃないかな」

「ん？そんなことはないだろ？だって俺は魔王を倒すために旅してたはずなんだから」

「それがさ、魔王がいるって世間一般に言われているのは『第三大陸』なんだけど、僕、実はそこに行ったことがあるんだ。あそこには魔王の居城（きじょう）なんてないよ」

・・・『第三大陸』？なんだそれは。というか、俺は今いるところもよくわかってないんだが・・・。

質問しようと口を開くが、先にシュナイゼルが話し出してしまった。

「魔王は今、『第一大陸』の近くにある、名もない孤島に住んでいるんだ。考えてごらんよ。君の、その聖剣が創（せいこう）られた聖国家と、目

と鼻の先に魔王がいるんだよ？面白いよね」

何が面白いのかわからない。だが先に、地理の確認がしたい。根^{こん}本^{ほん}がわかっていないからか、話の大部分が頭を素通りしてしまった。今度こそ、とシュナイゼルの顔を見るが、またしても先を取られてしまった。

「まあ、魔王云々は今はどうでもいいよ。君には、先にやるべきことがあるからね。まず、」

「いやいや、ちょっと待てっ・・・！今の俺には地理の記憶もないんだ。名前だけ言われても全然想像できない！」

さらに何か言おうとするのを無理矢理遮った。シュナイゼルは、何か言いたげな顔をしたが、諦めたように溜息をついた。

「仕方ないな。じゃあ、まずは簡単に地理について説明するよ」

その5

シュナイゼルの話を要約するに、俺たちが今いるのが『第二大陸』と言われるところで、国のない、街ごとに治められている、自治区と呼ばれる場所だ。そして、『第一大陸』はもつとも発展している大陸で、大国が密集^{みつじゅう}しているらしい。『第三大陸』は、未開の地で行くだけでも大変な場所なのだとか。

「行くだけで大変な場所って、なんでお前はそんな危ない所に行きたんだ？」

「ん？さあ、なんでだったかな？それより、この3つの大陸は、北を上にして『第三』『第一』『第二』の順番で並んでいるんだ。そして、さっき言った魔王の住む孤島^{ことう}は、『第一大陸』から見て北東に位置する海洋にあるんだ」

「へえ。・・・この数字って意味あるの？」

「ああ、この『第一』とか『第二』っていうのは文明の発展具合を表しているんだよ。だから『第一大陸』は一番発展していて、『第三大陸』は文明自体がない、とされているんだ」

ふむふむ、と相槌^{あいづち}を打つ。段々頭に地図が出来上がってきたぞ。といっても大陸の具体的な形がわからないから、大きなたらこが縦に3つ並んでいるような地図だが。まあ、今はなんとなくわかればいいよな！

「詳しいところは省^{はぶ}くけど、後で地図とか手に入れたほうがいいんじゃないかな。目で見たほうがわかるからね」

「そうだな」

「で、本題だけど・・・魔王の居場所がわかってても、記憶のない今の君が行っても危ないだけだね」

「まあ、そうだな」

今の俺は自分の身すら守れるか不安なぐらいだからな。

「そこで、先に君の記憶を取り戻そうと思う。それは昨日も言った通りなんだけど、実は、君の記憶を取り戻す方法に心当たりがあるんだ」

「えっ？本当か！？」

「こんなことで嘘は吐かないよ」

記憶を取り戻せる。それは願ってもないことだ。期待に、顔が笑みの形を作り始める。でも、名前がわかってから良いことばかりが続いている。もしかしたら、そろそろ悪いことが起こるんじゃないだろうか。そんな不安から笑みが中途半端になって、怪しい顔になってしまった。

頑張つて笑みを堪^{こら}えている俺と違って、シュナイゼルは綺麗な笑顔を浮かべている。いや、綺麗というよりは、愉しくて仕方ない、お気に入りの玩具^{おもちゃ}を前にした子供のような笑顔だ。これから何して遊ぼうかな、とか言い出しそうな、そんな顔を見て、笑みが引つ込んだ。

何か嫌な予感がする。

「あれ？どうかしたのかい？もつと喜んでくれていいんだよ？念願^{ねんがん}叶うんだからさ」

「あ、ああ……。それで、記憶を取り戻す方法ってのは？」

まさか……。頭を強打するとか、変な薬を飲ませるとか、そういうのじゃないだろうな。もしそうだったら、全力でお断りしよう。魔王に挑^{いど}む前に命がなくなる。

「うん、それはね・・・」

「それは・・・？」

「神官様に頼めばいいんだよ」

「？神官様？」

「そう。聖国家には神官っていう特別な役職があるんだ。その神官様は、祈りの力で様々な病気や怪我を治すことができるんだ。聞いた話では、記憶もある程度は戻すことができるらしいよ。どう？試してみる価値はあるんじゃないかな？」

確かにその話が本当だったら、試してみても良いかもしれない。それに、どうやら命に関わるような何かをされる心配もないようだ。なら、是非^{せひ}やつてもらおう。

「よし、じゃあ、聖国家に行つて神官様に頼んでみよう！・・・」
ところで、聖国家つてどこにあるんだ？」

「さっきの話聞いてなかったのかい？聖国家は『第一大陸』にあるよ。でもここからじゃ船に乗って行かなきゃいけないし、距離も大^だ分^{いぶん}ある」

「そうか・・・。てか、俺、金なかった。何か仕事しないと旅にも出れない・・・」

そう、俺の持ち物は今着ている服と、聖剣のみ、だ。金やその他の荷物は、多分どこかで落したんだろう。そういうわけで、俺は現在無一文だったりする。長期の旅になんて出る余裕はない。

「勇者が旅に出るために働くつて・・・、それはそれで面白いけど、いらない心配かな」

「どういう意味だ？」

「いやだなあ。勇者様は僕が何なのか忘れちゃったのかい？・・・僕は魔法使い、だよ？『転移』の魔法くらい使えるよ」

「いや、魔法使いだなんて今初めて聞いたから!!」

「そうだったっけ?でも見たらわかるでしょ」

「見てもわかんないからっ!」

でもよく考えてみたら、魔法使いっぽい格好しているし、勇者の仲間になるうと言っているのだから何か出来て当たり前だろうし、推察しようと思えばできた、かも・・・?・・・。いや、無理だろ。

とか頭の中で推理したり、ツツコンだりしてから、目の前の青年に目を戻す。・・・うん、見てもわからない。

「君の様子を見ているの嬉しいんだけど、話を進めてもいいかな?」

「えっ?あ、ああ、いいよ」

「じゃあ、『転移』の魔法を使うから・・・そうだな、被害が出ない街の外がいいかな。ついてきて」

そう言ってさっさと歩き出してしまふ。その後ろ姿を追いかけて俺も歩き出す。

『転移』の魔法ってそんな危険なのか?魔法のことは、当然思い出せていない。そのせいか、どんなものなのか全く想像できない。

魔法とはどんなものなのか空想している間に街を出て、誰もいない森の片隅にたどり着いた。かたすみ

「ここがいいかな。じゃあ、『転移』させるね」

「ちよつと待つて。『転移』って危ないのか?」

「まあね。小さな物ならそこまで魔力はいらないけど、人間なんて大きなものを『転移』させようと思うと、大量の魔力がいるんだ。それが暴発したら・・・危ないでしょ?」

「そ、そうだな」

膨大な魔力が暴発して、辺り一帯が吹き飛ぶ様を想像してしまっ
た。

「これって、俺は大丈夫なのか？」

「何？勇者様は僕の腕を信用してくれないの？」

「いや、そういうわけでは・・・」

ただ、怖いだけ、とは言えなかった。無駄な虚栄心だが、言えな
いものは言えない。語尾を濁した俺を見て何を思ったのか、シュナ
イゼルは心から愉しそうな笑みをこぼした。

「心配しなくても、無事に送り届けるよ」

「あ、ああ・・・送り届ける？一緒に行くんじゃないのか？」

「ああ、うん。さつきも言ったけど、人間を『転移』させるにはか
なり魔力が要るんだ。それに、正確にコントロールしようと思うと、
集中力も必要だ。だから、一人ずつ送ったほうが安全なんだよ」

「そうか・・・」

「そう。不安だとは思っけど、大丈夫。ちゃんと送るから」

「・・・うん。信用してる。頼むよ」

腹を決めてシュナイゼルの前に立つ。それを確認したシュナイゼ
ルは、荷物の中から杖を取り出した。

俺に向かって杖を掲げて、何かよくわからない呪文を呟く。

「・・・！」

変化は突然だった。訳のわからない呪文を聞いていたはずが、ふ
いに体が軽くなったのだ。そして一瞬の間の後、着地したような軽
い衝撃を受けた。

気が付いたら、どこか、暗くて広い所に出ていた。恐る恐る辺り

を見渡す。暗くてわかりづらいが、どうやら室内のようだ。それ
かなりの広さがあるらしく、隅が見えない。近くに太い柱があるの
が見えるが、それ以外は暗闇くらやみに吞のまれていてわからない。暗さから
くる本能的な恐怖に体が竦すくむ。

何だつてこんなところに『転移』させたんだ。それに室内でなく
てもよかったはず……。次に来るはずのシュナイゼルに言うべき文
句を頭の中に並べる。そうすることで、少し恐怖が紛まぎれた。

そうだ。ここは聖国家のどこかなのだ。それにシュナイゼルが変
な所に飛ばすはずがない。恐れることは何もない。

のほほんと、シュナイゼルを待つ俺は完全に油断していた。だか
ら、この後、死ぬほど驚いたし、実際死ぬかと思う出来事に遭遇そうくう
することになった。

その1

「客を招いた覚えはないのだがな」

「・・・！」

突然暗闇から聞こえた声。そして、いきなり視界が明るくなった。所々に置かれた灯りが広大な空間を照らし出している。

明るくなった視界の中で、何かが動いた。それは、小さくて、羊のようなもこもこした体に、山羊のような短い角を持っていた。「それ」は床から30センチほど上に浮かんでいた。更に、黒い燕尾服・のようなものを着ている。

なんだこの可愛い生物は。

そんな感想を持って見ていると、「それ」が俺の近くまで飛んで（文字通り、宙を浮いたまま）きた。

「頭が高い！」

甲高い子供の声が響いた。こんなところに子供がいたのかと、顔を巡らせてみるが見つからなかった。代わりに、やたらと偉そうな男を見つけた。・・・距離があるのに何故偉そうだなんてわかったんだ、俺。自分の発想に疑問を覚えて、もう一度男を見てみた。

そいつは短い階段の上、俺より高い位置に、遠目でも歴史があることがわかる椅子に座っていた。肘置きにもたれた右腕で顎を支えている。視線は完璧に俺を見下していた。

これだ。この上から視線が偉そうだと感じた要因だろう。立ち位置の問題なんて多分関係ない。こいつなら逆の立ち位置でも、見上げているのに見下ろす、という荒業をやったのけそうな顔をしている。

目が合った。何か言ってくる。そう思って身構えたが、予想に反

して何も言ってこなかった。何故かと考えたが、すぐに思い至った。距離があるからだ。遮るものがない空間とは言え、ちよつと大声を出さなければ届かない距離だ。

「貴様、頭が高いと言っておろうが！頭を下げよ！」

また子供の声だ。そういえば子どもを探していたんだっけ。一度男の様子を見る。口を開く気はないらしい。ゆつたりと座ったまま動こうとしない。あの男は後回しにしよう。とりあえず先に声の主を見つけることにして、視線を下げる。足元でぴよこぴよこと羊（？）が跳ねている。それ以外目につくものはない。

明るくなったとはいえ、広いこの部屋が隅々まで見通せるようになったわけではない。柱の陰に隠れていたら俺には見えないだろう。かなり近くで聞こえたし、そちらの方が可能性があるか。なんて考えているとまた聞こえた。

「これ！無視するでない！」

子供の声に似合わない老人のような喋り方だな。羊っぽいものが声に合わせて跳ねている。可愛らしくて、目的を忘れそうになる。思わずじつと見つめてしまう。

「返事をせんか！無礼者！！」

苛立たしげな声が響く。目の前には、まるで自分が喋っているかのように口を動かす羊らしき物体。

……まさか。

外見はファンシーな「それ」は、怒ったように腕を振り上げて、再び「無礼者！」と怒鳴った。

「え・・・えええー!？」

「うるさいぞ!・・・とにかく頭を下げる! 跪け!」
ひざまず

ぼーん、と「それ」は飛び上がって、俺の頭を小さい拳でぶん殴った。

「いでっ!！」

予想外に痛い。たまらず頭を押さえてしゃがむ。

「跪け! あの方の前での無礼は、吾輩が許さんぞ!！」

羊がぼこぼこ、と頭を叩いてくる。小さな見た目に反して、一撃一撃が重い。容赦のない攻撃に、意図せず跪いたような格好になってしまった。すると、ようやく攻撃が止んだ。

「うむ、それで良いのじゃ。魔王陛下の前では、常にその姿勢でいるようにするのじゃぞ」

「・・・え・・・?」

今・・・聞いてはいけない単語を聞いた、ような気がする。

いやいや、聞いてない。俺は何も聞いてないぞ! 俺の旅の目的が目の前に居るなんて、そんなことあるわけないからなっ!

「これい! 返事をせぬか、無礼者めが!」

可愛い羊が横で起こっているが、俺は壇上だんじょうの男から目を離せない。
・・・わかった。きつとあの人は聖国家の王様とかだ。羊も「陛下」って言ってたし、その前の単語は何か別な単語と聞き間違えただけだろう。そう考えれば納得だ。だって俺は聖国家に『転移』

してきたんだから。うんうん、当たり前だ。
一人納得した俺。

「遠いな・・・」

誰かの呟く声と、指を鳴らす音。

「うえあっ!!?」

体が前に引つ張られた。とつさに踏ん張ろうと力を込めるが、両足とも宙を浮いてしまつて意味を為さない。あつという間に男の姿が大きくなる。違う。近づいたのだ。と、引つ張っていた何かが消えた。しかし、飛んできた勢いまでは消えてくれなかった。今度は床が急速に近づいてくる。反射的に体を丸めて衝撃に備える。

「・・・っ!!」

頭を守る手に固い衝撃が。次いで体が転がる感触。最後にどこかの角に背中がぶつかつて止まつた。

「・・・~~~~っ・・・」

打つた背中が痛みでじんじんする。緩慢な動作で、丸まっていた体を伸ばそうとする。だが、体が思うように動かない。というか動きたくない。身動きすらできずにいる俺の頭上から、怒鳴り声が降ってきた。

「貴様、魔王様の御前で何と無様な姿をしとるか!ちゃんとせい!」

また羊の言う言葉が間違つて聞こえた。耳は駄目らしいが、他は

大丈夫だろうか。

体中の感覚を意識する。そうすることで現状を理解しようと試みる。

どうやら俺は、先ほど見た短い階段に逆さまに伸びているようだ。ようやく自分の状態を確認できた俺は、頑張つて目を開けてみる。涙で滲む視界に、俺が飛んできたのとは雲泥の差で、ゆっくりと安全に到着した羊の怒り顔が入ってきた。今はその姿に可愛いなんて思っていていられる余裕がない。というかこの羊、俺が声も出せないほど痛がっているのが見えていないのか？

「そもそも貴様、一体どこから入ったのじゃ。不法侵入じゃぞ」

小指の先ほども心配していないようだ。舌打ちしたいのを我慢して起き上がる。治まったのか麻痺したのか、ある程度痛みが引いた体を立て直す。床に胡坐をかいて座る。やっぱり背中が痛い、頭は正常に働かだしている。試しに今羊が言っていたことを吟味してみよう。

えっと、不法侵入がどうかって話だったな。・・・いや、そもそも、浮いて喋る羊っぽいもの、という存在自体が常識外なやつに、常識を諭されたくない。それとも俺が忘れてるだけで、この生物は普通に存在するものなのか？

「・・・『転移』して来た、か。何の用で俺の城に来た？」

俺が自分の中の常識を疑いだしたとき、背後から声がした。振り仰ぐと、壇上に立った男と視線がぶつかる。

冷たい目だった。他人に命じること慣れた態度で、羊が言っていた「陛下」という呼び方がしっくりくる。ということは、この男は本当に王様だということだ。そう思うと、にわかに緊張してきた。

「陛下が直々に声をかけて下さっているのだぞ！返事をせぬか！」
「あ、えっと・・・こ、ここはどこ、ですか・・・？」

羊にせつつかれて、関係ないことを口にしてしまった。案の定、男は眉を顰^{ひそ}める。

冷静になれ、俺。意識して呼吸を緩^{ゆる}やかにする。そこで初めて、男の顔全体を見る余裕が出てきた。

まず印象的なのは、その冷たい目だ。冷たいどころか凍っているようだ。そのくせ瞳の色は、炎の赤。切れ長の瞳の上には整った眉すつきりした鼻筋に、大き過ぎず小さ過ぎない口。それらが乗る肌は、白い。病的な白さではない、白さ。その白い肌とは対照的な真っ黒な髪。

ぱっと見ただけで、女の子にとってもモテそうな外見だった。

いろいろと負けた気分を味わいつつも、せめて姿勢だけは上品でいようと、できる限り綺麗に跪く。上手くいったかどうかからないが、視界の隅で騒いでいた羊が大人しくなったので、とりあえず良しとした。

意識を男に戻す。男は無表情で俺を見下ろしていた。俺が男を観察したのと同様、俺の全身を眺めているようだ。

「あ、あの・・・」

沈黙に堪えかねて口を開く。男が俺と目を合わせてきた。

「何だ」

「え？いや、えっと・・・それで、ここはどこなのかっていうのは・・・？」

失礼を承知でもう一度同じ問いを発する。考えないふりをしていても、どうしても考えざる負えなくなってきたのだ。しかし、男は

何も言わなかった。ただ視線を下へずらただけだった。

何だ？答えられないことでもあるのか？それとも気を悪くした．．？

だがすぐにそれらが見当違いであることがわかった。男の視線は俺の腰にある、聖剣『シュトラウス』を捉えていたのだ。

王様の前で武装しているのは如何にも拙いいか気がする。慌てて弁解しようとするが、男がにやりと笑ったのを見て言葉を飲み込んだ。まるで待ち望んでいたものが来たかのような、そんな歓喜かんきに満ちた、それでいてどこか物騒ぶつそうな笑みだった。

「意外と速かったな」

「はい？」

「だが、まあいい。さあ、始めるか」

何のことを言っているのかわからない。何かをやる気満々な男が、俺に向かって右手を掲かげる。俺はただ呆然とそれを見ているだけだった。

その2

体中がとても痛いです。

思わず敬語が出てしまっぐらい痛めつけられた。

「弱過ぎて話にならん」

壇上から男の声がする。何で、こんなことになったのか。俺の身に起こったことは単純明快だ。いきなり魔法で攻撃されたのだ。しかも連続で。反撃どころか、『シュトラウス』を抜く暇もなかった。そして、あっという間に意識は彼方に飛んで行ってしまった。気を失っていたのは、そんなに長くはなかったようだが、おかげでダメージは少しも回復していない。

動かない体で、男の苛立つた声を聞く。

「加減してもなお、避けることすら出来ないとは……。貴様、鍛錬は充分に行ったのか？それに、仲間を一人も連れてこないとは……。その胆力は良し」というものだが、勝つためには手段を選んでいる場合ではなからう。おかげでこちらは随分と退屈だったぞ」

なんだろう……。何で俺は、ぼこぼこにされた拳げ句に説教されているんだろう？

頭が痛い。攻撃を受けたから、だけではないだろう。どうしたらこんな、わけのわからない状況になるんだ。そろそろ限界だ。体的にも、頭的にも。

「うん？また気絶したのか？軟弱この上ないな。……。仕方ない」

盛大な溜息が聞こえた。

ふわっ、と体が軽くなる感覚がした。次いで労わるかのような優しいぬくもりが体を包み込む。心地良い風が頬を撫でる。体が動かないのをいいことに、ゆったりとその感覚に浸る。しばらくそうしている、やんわりと包み込んでいた空気が薄まってきた。やがて完全に消え、俺は目を開けた。気がつく、体の痛みが全く感じられなくなっていた。

「痛く、ない・・・？」

寝転がっていた体を起こす。あちこち触って確かめてみるが、どこにも痛みはない。不思議に思っていると、羊が目の前に飛んできた。

「貴様の傷を治したのは、魔王陛下である。感謝の言葉を述べるのじゃ！」

「・・・」

ああ、俺は本当に何と聞き間違えているんだろう。しかし、訊き返すのは躊躇^{ためら}われる。というか、普通に恥ずかしい。状況が許さなかったとはいえ、最初に聞き直すべきだったな。反省反省。

「何故黙ったままなのじゃ。魔王陛下に失礼であるぞ！」

まだ良く聞こえないな。

「・・・とか、現実逃避している場合じゃないか。ああ、本当に、何でこんな早くに、最終目標と出会ってしまったんだろうか・・・？」

ふと、シュナイゼルの愉しげな顔が頭をよぎる。考えまいとしていたが、ほぼ間違いなく、絶対、あいつのせいだ。でなければ、運命のいたずらだ。

今となつてはどうでもいいことを考えながら、立ち上がる。改めて、魔王と向き合う。

魔王は、最初に見たときと同じように、椅子に座つてこちらを見下ろしていた。先ほどと違うのは、その足元に、聖剣『シユトラウス』が無造作に置かれているところだろう。

さて、どうするか……。と考えるが、唯一の武器を取り上げられ
ては、どうしようもない。とは言つても、完膚なきまでに叩きのめ
された後で、もう一度戦う、なんて選択肢は浮かびもしないが。か
といつて、このまま殺される、という展開にはしたくない。なんと
かしくは……。！

せめてもの抵抗、ではないが、眼前の魔王を睨みつける。冷たい
双眸が、俺を見据える。

「……何だ、その眼は。負けを認めないつもりか？それとも、言
い訳でもするのか？」

小馬鹿にしたように鼻を鳴らす様は、「魔王」のイメージ通りだ
った。

ここで怯んではいけない。腹に力を込めて息を吸い込む。

「違う」

「ほう……。？では、何だ？」

「……。話を、聞いてほしい」

「話？」

そこで魔王は、考えるように口を閉ざした。冷めた視線は、俺の
考えを読み取ろうとしているのか、少しも逸らされない。と、魔王
が微かに笑った。「面白い」。そんな声が聞こえてきそうな笑みだ。

「その話とやら、聞いてやろう」

またしてもというか、何というか。記憶を失ってからの俺が会
うのは、何でこう人の不幸を愉しんじやう手合てあいばかりなんだ。

あの時俺が話したのは、特に意外性もない、俺の現状だった。つ
まり、俺の記憶がないって話だ。その結果、俺は魔王の城に滞在たいざいす
ることになった。

「何でなんだ・・・」

あれは、時間稼ぎを考えての発言だったのだ。そう、俺としては、
あの場をどうにかできればよかったのだ。そういう点から考えれば、
成功したのだろうか・・・。

それにしても、戦いを楽しみたい魔王に対して、「記憶を取り戻
してから戦ったほうが楽しめるよ!」と言ったつもりが、何故こう
なった。魔王は受け取り方すら予想外なものなのか？

どう聞き取ったのか、俺の話を聞いた魔王は、こう言ったのだ。

『面倒くさいな。今から、強くなるために鍛えたほうがよっぽど有
意義だ』

思い出す度に、「どうしてなんだ」と思わずにはいられない。し
かもその後、

『それに、ちょうど暇を持て余していたところだ。並みの戦士では、
手も足も出ないほど強くしてやろう』

とか言った。嬉々としてそう言った魔王は、何て言うか、悪意の

塊のように見えた。俺に嫌がらせをしているようにしか見えない。それからは、必死で抗議する俺を無視して話は進み、今に至る。いつの間にか城に滞在することになったし、魔王直々に戦闘訓練を受けることになっていた。

「どこで間違えたんだろうか・・・？」

可愛い羊に案内された俺の自室、ということになった一室で、俺は何度目かの溜息を吐いた。

何度思い出しても、現状を打破する^{たは}方法がわからない。溜息ばかりが出てくるだけだ。そして、最後には必ず、あの魔王の嬉しそうな顔を思い出す。あれはどう考えても、俺をどのようにして痛めつけるか考えている顔だ。明日からの訓練とやらで、生き残れる自信がない。

「・・・はあ・・・寝るか」

うん、明日のことは明日考えよう。とりあえず今日は、これ以上何もないと良いな。そんな願いを胸に、やたらと豪華な^{じゅうき}ベッドに身を横たえる。目を閉じると、すぐに眠りが訪れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0223w/>

未来の伝説

2011年11月30日11時51分発行